

Romanness in *La Romana*

Teruaki J. I. Torigoe

Keywords: Rome; representation; *La Romana*; Alberto Moravia; mobility; God; money

ABSTRACT

Alberto Moravia, a twentieth-century Italian writer, is an important figure when we consider the representations concerning Rome, for he was born and lived in Rome and wrote many works whose background is set in this city. In one of his novels, *La Romana*, its narrator-protagonist who is typically Roman both in that she is a seventh-generation Roman of the working classes and in that she is a prostitute, makes continuous reflections about the past happenings in her life.

Her Romanness, which is notable in her thoughts and reflections, is represented in three aspects: her attitude toward society, her attitude about money, and her relation with God.

Her attitude toward society is remarkable for its lack of social and economic ascension. She is without ambition to ascend the social ladders both before and after starting to work as a prostitute. Partly because of her lack in such ambition, she stays in the lowest rank of prostitutes and remains poor without attaining economic stability.

She is noteworthy for lack of avarice in her work, and shows doubts about the essential goodness of money, sensing general sinfulness in its gaining.

Her relation with God is conspicuous for the fact that her reward of repentance is neither apparent nor given in this world.

Regarding all these three points, the narrator-protagonist of *La Romana* is an exact antithesis of the narrator-protagonist of Defoe's *Moll Flanders*, an eighteenth-century novel which was set in the contemporary England and its American colonies and which Moravia had in mind when writing his novel of a twentieth-century Roman girl. Moll, a bigamist, concubine, thief and pickpocket who is remarkably avaricious with an excellent commercial sense, is rewarded with financial success and social ascension directly for her repentance after

life of sin.

『ローマの女』のローマ性

はじめに

鳥越輝昭

イタリアの作家アルベルト・モラヴィア (Alberto Moravia, 1907-90) は、二十世紀を代表する作家のひとりだが、表象としての〈ローマ〉を考える場合にも欠かせない存在である。モラヴィアはローマに生まれ、ローマに住み、ローマを舞台にする多くの作品を書いたからである。

モラヴィアに『ローマの女 *La Romana*』(1947) という長編小説がある。この小説は、出版の数年後に、ルイージ・ザンパ (Luigi Zampa, 1905-91) 監督により、同名で映画化された (*La Romana*, 1955)。

小説も映画も、あらずじは同じである。主人公は、ローマの貧しい寡婦の一人娘として生まれたアドリアーナ (Adriana)。時代背景は一九四〇年代、ファシズムの時代である。美しく魅力的な娘アドリアーナは、結婚を夢見た初恋の男に裏切られ、娼婦となる。アドリアーナは、多くの男たちと肉体と金銭だけの関係を持つなかで、ひとりの若い大学生を恋する。ところが、反政府運動に関わるこの青年は逮捕され、活動内容と仲間

とについて白状してしまい、それを苦に自殺する。

しかし、小説『ローマの女』と映画『ローマの女』とは、まったく異質の作品である。映画『ローマの女』はたしかに小説のあらすじを忠実に映像にして見せるが、それにも関わらず、小説を変質させてしまった。その原因は、小説『ローマの女』の主眼が、主人公が自分の身につぎつぎに起こった出来事について、回想し省察を加えてゆくことにあったからである。つまり、映画『ローマの女』は出来事を連ねてゆくアクションの作品だが、小説『ローマの女』は「思考」と「省察」の作品なのである。それを証拠立てるかのようには、小説『ローマの女』には、「思考する *pensare*」と「省察 *riflessione*」という語が満ちている。それゆえ、この小説の本質にかかわる問題もまた、主人公の「思考」と「省察」とに関わるものになるはずである。

小説『ローマの女』の本質にかかわる問題を検討する場合、まず『*La Romuna* ローマの女』というタイトルそのものに注目する必要があるだろう。この小説の題は、なぜ、主人公の名前の「アドリアーナ」や、あだ名の「○○と呼ばれた女」や、ストーリーの内容にかかわる「ある娼婦の回想」ではなくて、“*La Romana*”なのか。ちなみに、娼婦を主人公にした有名な小説のなかで、エミール・ゾラ (*Émile Zola*, 1840-1902) の『ナナ *Nana*』(1879) は主人公の名前をそのまま使った例、小デュマ (*Alexandre Dumas fils*, 1824-95) の『椿姫 (=「椿夫人」と呼ばれた女) *La Dame aux camélias*』(1848) やダニエル・デフォー (*Daniel Defoe*, c.1660-1731) の『モル・フランダース (=「モル・フランダース」と呼ばれた女) *Moll Flanders*』(1722) はあだ名を使った例である。

しかも、『*La Romana*』という題は、定冠詞の“*La*”を使用している。イタリア語の定冠詞は英語より広範

囲に使われるけれども、この小説のタイトルの場合には、「これぞまさしくローマの女」「ローマ女の典型」というニュアンスに受け取るべきだろう。そうすると、小説『ローマの女 *La Romana*』の場合には、タイトルそのものが、ゾラの『ナナ』のような特殊例を描き出す小説と異なり、代表例・典型を描き出そうとした作品であることを示していることになる。

晩年のモラヴィアは、インタヴューに答えて、小説『ローマの女』は、一九三六年の出来事が作品に結実したものだとい⁽¹⁾う。この年、モラヴィアは、ローマの街路で見かけた娼婦が気に入る、連れられてその家に行った。娼婦は二十歳そこそこの若さで、裸になるとみごとな身体をしていた。ところが、そこへ突然、娼婦の母親が、湯の入った水差しとタオルを持って入ってきて、「どうだい、こんな身体をどこかで見たことがおありかい、ごらんよ、どこかで見たことがおありかい……」と言ったのだそうである。モラヴィアは、この出来事の十一年後、「ローマの庶民階級の母親と娘との関係」について、短編小説を書こうとしてタイプライターに向かったところ、思いがけず、五百五十頁の長編小説ができあがってしまったという。モラヴィアの眼は、「ローマの庶民階級」に向いている。

もう少し焦点を絞ろう。『ローマの女』の主人公アドリアーナとして描き出される典型性、いいかえれば、アドリアーナという〈ローマの女〉の典型性はどのようなものなのか。モラヴィア自身が、自分の執筆法について、「わたしは人生の一事例について物語り、その事例を描き出しながら、文化状況一般に至るのです (racconto un caso della vita e poi rappresentandolo arrivo alla cultura)」というのだから、〈ローマの女〉の典型性・一般性を問うのは正当な問いなのである。そして、小説『ローマの女』の本質は、すでに見たとおり「思

考」と「省察」とにあるのだから、〈ローマの女〉の典型性は、おそらく、アドリアーナの「思考」と「省察」のなかに見つかるはずである。

小説『ローマの女』は、モラヴィアが、「文学の伝統から考えるなら」、ダニエル・デフォーの小説『モル・フランダース』を念頭に置いて書いた作品だとい⁽³⁾う。なるほど、『モル・フランダース』も、主人公が、自分の身に起こった出来事を、考察を交えつつ語る小説であり、娘時代の主人公が結婚を餌とする男にだまされて道を踏み外す点、男性遍歴を重ねる点、そして物語の最後に改心する点も似ている。『モル・フランダース』の主人公は、刑務所のなかで犯罪者の母親から生まれ、母親は北アメリカ植民地へ島送りにされる。主人公は、養家の兄弟のひとりに騙されて愛人にされ、もうひとりと結婚する。この豊かな夫が早世したのち、主人公は数人の豊かな——ただしそのひとは豊かそうだけの——男たちと結婚を繰り返す。そのなかには重婚もあり、同じ母親から生まれた弟との近親相姦関係もふくまれる。主人公は、数人目の金持ちの夫が死んで生活に困り、プロの盗人となって財産を築くが、逮捕される。しかし主人公は死刑寸前に改心し、特赦により、かつて結婚した男のひとり（じつはプロの追いはぎ）と一緒に北アメリカ植民地へ島送りとなる。主人公は、植民地経営に成功し、英国に戻って安楽に暮らす。

しかし、じつを言えば、『モル・フランダース』と『ローマの女』とが類似しているのは、主人公が回想する一人称小説であること、そして、主人公が正道を外れた生活をする切っ掛けとなる出来事と、そういう生活の終え方ぐらいのものである。これらふたつの小説は、他の諸点についてはずいぶん異なっている。相違は多すぎて際限が無いから、われわれは焦点をふたりの主人公のあり方だけに絞ることにしよう。では、十七

世紀後半～十八世紀のイングランドと北アメリカとを舞台に描き出されたモル・フランダースという女性と、二十世紀半ばのローマを背景に描き出されたアドリアーナという女性との本質的相違は、どこにあるのだろうか。『ローマの女』が『モル・フランダース』を念頭において書かれたものなら、アドリアーナとモルとの相違は重要である。その相違にこそ、『la Romana（ローマ女の典型）』の特徴が現れるだろうからである。そして、ふたたびくりかえして言えば、この相違の本質は、ふたりの主人公の「思考」と「省察」との相違に現れるだろう。

以下の拙論は、モラヴィアの小説『ローマの女』の主人公アドリアーナについて、〈ローマの女〉の典型性を洞察しようとするものである。方法として、われわれは、彼女の「思考」と「反省」とに目を配りながら、とくにデフォーの小説『モル・フランダース』の主人公と比較し、併せて『椿姫』と『ナナ』という娼婦を描いた有名作品も参照することになるだろう。〈ローマの女〉もまた、いうまでもなく、表象としての〈ローマ〉の重要な一部分なのである。

一 代表的職業、非上昇性

まず始めに、小説『ローマの女』の主人公アドリアーナが〈ローマの女〉の典型となる客観的条件を見ておこう。客観的条件の第一は生まれであり、第二は職業である。

小説では、アドリアーナはローマに住んで七代目という設定である（p. 962）⁽⁴⁾。生粋のローマ子なのである。

また、アドリアーナの携わる娼婦という仕事が、貧しい家庭に生まれ育ち、十分な教育を受けることができない女性たちにとって、ローマという都市で従事することのできる数少ない職業——つまりは代表的職業——であることに注目しておくべきだろう。アドリアーナは、その意味でも、典型的な〈ローマの女〉なのである。「この町ローマの住民に目立っていた職業は、裕福な家の召使い、無数にある飲食店の亭主、それに娼婦だけだった」というのが、近代ローマについて述べる信頼すべき書物の記述である。⁽⁵⁾この記述は、直接的には十八世紀前後のローマについて述べたものだが、庶民階級の女性のための職業事情は、アドリアーナの物語が展開する一九四〇年代についても、大きく変化しているわけではない。

小説『ローマの女』のなかで庶民階級の仕事として言及されるのは、男の仕事としては、(アドリアーナの亡父が従事していた) 鉄道員、(アドリアーナが恋仲となる) お抱え運転手、(盗品も扱う) 彫金師、マンションの門番、警官があり、女の仕事としては、(母親とアドリアーナが従事する) ワイシャツの縫い物師(プロの仕立職人ではない)、裕福な家の女中、婦人小物販売店の売り子、劇場の踊り子、(アドリアーナが娼婦になるまでしていた) 画家のヌードモデルぐらいのものである。

やはりモラヴィアの書いた作品のなかに、『ローマ物語 *Racconti Romani*』(1954) という短編集がある。これは、『ローマの女』に描かれた時期からややのちまでのローマ庶民の百態を描いている。そのなかでは、庶民階級の男たちの職業としては、各種の工員(機械工、配管工など)や、職人(靴職人、鉛管工、理髪師など)、小商人(菓屋、小間物屋、肉屋、たばこ屋など)、そのほかにウェイター、守衛や倉庫番、ゴミ回収業者などと、かなり多数に言及がある。しかし、女の仕事として言及されるのは、看護婦、女中、仕立屋、クリー

ニング屋、マニキュア師などで、種類が少ない。あいかわらず、娼婦はローマの庶民階級の女性にとって数少ない代表的職業のひとつなのである。

庶民階級の女性の代表的職業としての娼婦が描かれる点で、『ローマの女』は、小デユマの『椿姫』やゾラの『ナナ』と事情が似ている。『椿姫』や『ナナ』の舞台となっているパリの人口はおよそ百万人で、そこに三百の娼館があったという。⁽⁶⁾ それぞれの娼館に数名ずつの娼婦が居たとすると、総数はかなりの数になる。そのほかに、ナナも一時期携わる個人営業の街娼たちがいた。娼婦は、女性の職業として目立つもののひとつだったのである。ちなみに『モル・フランダース』の主人公が携わった職業のひとつは、娼婦というよりもむしろ妾だが、その話の頃のロンドンでは数十万人の人口のなかに万単位の数の娼婦がいたという。⁽⁷⁾ 当時のロンドンでもまた、娼婦は女性の代表的職業だったのである。

ところで、『モル・フランダース』、『椿姫』、『ナナ』の主人公たちと比べてみると、『ローマの女』の主人公アドリアーナには際立った相違がいくつかある。それらの相違をわれわれは〈ローマの女〉の特徴と見なすことができるだろう。

アドリアーナの特徴のひとつは、上昇性の欠如である。この欠如は意志と事実の両面に見られる。この女性は、物心ついたときから社会的上昇をほとんど求めず、娼婦となっただけから社会的上昇を求めない。そして、多分にその結果として、社会的上昇をしない。

アドリアーナが娘時代に抱いていた夢は、（おそらくは同じ庶民階級かやや上の階級の男と）結婚して子供

たちと平穩に暮らすという、ささやかなものだった。

母の頭はいつも野心で一杯でした。それに対して、前にも言ったとおり、わたしには、夫と子供たちと過
 ごす落ち着いた生活のほかには、考えが浮かびませんでした (p. 656)⁽⁸⁾。

この引用にもふれられているとおり、アドリアーナに社会的上昇の期待を抱いていたのは母親の方である。
 興味深いのは、母親の期待していた社会的上昇の内容である。アドリアーナが十七歳で、画家のヌードモデル
 をしていたときの、母親との対話を見よう。娘は、初仕事を終えたところである。

……わたしの話を聞き終えると、母は、氣をつけるんだよ、この絵描きに悪いねらいはないかもしれない
 けれど、愛人にしようと思ってモデルを雇う絵描きが多いんだ、あの連中の誘いは絶対にはねつけるんだ
 よ、といいました。母は説明しました。「絵描きたちは、みんな空腹で死にそうになっているものさ。だ
 から、あの連中からは何も期待できない。……お前はそれほどの美人なんだから、もっと良いことを期待
 していい。はるかに良いことを期待していいんだよ。」……〈中略〉……

「どういう意味？」とわたしは驚いて、尋ねました。

母は、すこし曖昧な答え方をしました。「絵描き連中は、口にする言葉は豊かだけれど、お金は全然持
 っていない。……お前のような美人は、いつも上流の紳士方とお付き合いするべきなのさ (una bella ra-

gazza come te deve sempre mettersi coi signori)。」(p. 650)

イタリアのように階級差が大きくて「玉の輿」が起こりにくい社会状況をふまえてみれば、この母親は、娘に向かって、美貌を道具にして金持ちたち（「上流の紳士方」）の愛人となって裕福に暮らせ、つまりは高級娼婦になれと勧めていることになる。母親が娘に与える助言として、これは異例なものである。しかし、この母親は娘時代にやはり画家のモデルをしていた美人で、アドリアーナを腹に宿したために貧しい鉄道員と結婚しなければならなくなり、しかも夫に早く先立たれて、縫い仕事をして娘を育てなければならなかった。したがって、結婚生活——すくなくとも庶民階級の男との結婚生活——はおぞましいものだと考えるようになったのである。

今し方、わたくしはイタリアでは「玉の輿」が起こりにくいと書いたが、小説『ローマの女』のなかでは、庶民階級と上流階級とのあいだの懸隔は、ふたつの側面から示される。ひとつは、語り手アドリアーナの省察である。

裕福な人たちは、たしかに貧しい人間を好みませんが、貧しい人間を恐れはしませんし、貧しい人間を傲慢に見下しながら遠ざけます (neppure lo [=lo povero] teme e sa tenerlo a distanza con superbia e sufficienza)。けれども、教育もしくは生まれの良さから裕福な気になっている貧しい人は (il povero che per educazione o origine abbia l'animo del ricco)、ほんものの貧しい人間に出会うと怯えてしまうの

いふ (p. 962)。

主人公の愛した大学生は、国家官僚の未亡人のアパートメントに下宿している。大学生は地方の地主兼医者の息子であるから、「裕福な人たち」に属する。国家官僚の未亡人とその娘は、「教育もしくは生まれの良さから裕福な気になっている貧しい人」にふくまれる。主人公アドリアーナは、いうまでもなく、「ほんものの貧しい人間」に属している。右の引用文は、未亡人の娘が見せるアドリアーナに対する反応についての省察である。

庶民階級と上流階級との懸隔は、さらにひとつのエピソードによって示される。未亡人は大学生と、食卓に同席している主人公の前で、新聞の劇評や、役者たち、ローマの夜の娯楽、高級カフェ、映画、演劇、ホテルなどをつぎつぎに話題にして議論し合う。(若干の映画を除けば) 主人公の知らない話題ばかりなので、主人公は会話のなかに入ることができない。未亡人は、このような上流の会話をしてみせることによって、つぎのことを思い知らせようとしているのである。なお、大学生は主人公と結婚する気はないのだが、未亡人メドラーギには、主人公を「婚約者」だと紹介していることを思い出しておこう。

このようにして、わたしは、「上流階級の子弟が」庶民の娘と結婚するのは破廉恥なことだということ、それに、国家官僚の寡婦メドラーギの家に庶民の娘を連れてくるのが破廉恥だということを教えてあげてくるのよ (p. 965)。

未亡人の行為は恐怖と悪意から出たものである。しかし、主人公とその愛する大学生とのあいだには、事実として階級的な懸隔がある。この大学生はムッソリーニ政権のもとで、熱心に危険な反政府活動をしている若者だが、主人公は役者や演劇など、上流の、教養がないだけでなく、政治にも関心がなく、新聞も犯罪記事の載る社会面だけを読む女性である。このふたりは思想・教養の面で共鳴する可能性がない。ふたりのあいだには大きな懸隔が横たわっているのである。

さて、娘時代のアドリアーナが将来に対して持った夢は、夫と子供たちと穏やかに暮らすというささやかなものだ。結婚生活を送る家について抱いた夢もささやかなものだ。アドリアーナ母子の住むアパートメントはローマ市周辺部の鉄道官舎のなかにあったが、その近くに、鉄道官舎ほどは貧しくない、会社員や小商人の住む静かな地区があった。その地区には、小庭で囲まれた一個建ちの家々が建っていた。アドリアーナは、あるとき、窓越しに一軒の家のなかを見た。なかには小さく清潔な部屋があり、壁には花柄の壁紙が張られ、テーブルは天井の明かりに照らされている。数人の人たちがテーブルを囲んでいるなかに、子供が三人。テーブルのうえにはスープ入れが置かれ、母親がスープを掬いだそうとしていた。アドリアーナは、この一家の平穏で愛情に満たされている様子に魅せられ、「将来はぜひにこのような家に住むことを目標にするのよ」(p. 653) と、自分に言い聞かせるのである。

まいとにささやかながら、このような家に住むことが夢になったのは、アドリアーナの生まれ育った場所

が正反対の状態だったからである。鉄道官舎のある地区はいつも騒々しく、建物は壁がはがれ、黒ずみ、ひび割れており、玄関広間はまるで倉庫のようだし、アパートメントのなかは、がらくたを寄せ集めた古道具屋のようだった。それだから、アドリアーナは、静かで清潔で整頓された住居に住みたいと思ったのである。

娘時代のアドリアーナの夢が、結婚をして小さな一個建ちの家で夫と子供たちと平安に暮らすという、ささやかなものだったのと対照的に、『モル・フランダース』の主人公は、アドリアーナと同じ年頃のときから、強い社会的上昇意志を持っていた。すでに十四歳のときに、モルはこう考えていた。

わたしは貴婦人たちの邸宅で、上流の生活を味わってしまったので、以前に住んでいた地区ではかつてのようには落ち着くことができませんでした。わたしは、上流の夫人であることは素敵なことだと思いました。……〈中略〉……わたしは上流夫人たちのなかに居ることが好きで、上流夫人たちのなかにまた居るようになりたいと思いました (I lov'd to be among Gentlewomen, and therefore I long'd to be there again) (p. 14)⁽⁵⁾。

モル・フランダースは、ひとつの原因としてこういう上昇志向を持っていたからこそ、最終的には植民地に大農場を所有する資産家として、安楽に暮らすようになる。

娼婦になってからのアドリアーナにも、上昇志向の欠如が目立つ。娼婦アドリアーナは、庶民階級の出身者

として、豪華なレストランや、高級なダンスホール、上品なカフェ、上流向けのカジノのようなところは居心地が悪いので、仕事場にしない。アドリアーナは、むしろローマの町のなかの街路を歩きながら、通りすがりの男たちの気を惹くのを好む。アドリアーナは、まさしく英語でいう「street walker 街路を歩く娼婦」、つまり「街娼」になるのである。

わたしは、わたしの町ローマの街路に心底から惹きつけられ愛着を感じています。街路は、多くの館、教会、建造物、店屋、表玄関があつて、レストランや高級菓子店の部屋よりも美しく、心地よいのです。…〈中略〉…わたしにとつての客間、レストラン、高級カフェはいつでも街路なのです。そのようになる原因は、わたしが貧しく生まれたからです。おわかりのように、貧しい者たちは、自分では買えないものを置いている店屋のショーウィンドウを見るだけの安い買い物をしたり、自分では住むことのできない館の正面を見たりして、気晴らしをするものです (p. 774)。

しかし裕福な男たちは、街路を通るときは、歩いたりせずに、高級乗用車の座席に座り、新聞を読んだりしている。したがって、アドリアーナは、裕福な客を見つける可能性をはじめから排除してしまっている。つまり、「わたしは、ほかのどの場所よりも街路を好んだことによって、(ジゼッラのいう) 心の奥底の嗜好を犠牲にしても追求すべきような出会いを、早々に排除してしまいました (mi preclusi subito tutti quegli incontri che, secondo Gisella, avrei dovuto ricercare anche a costo del sacrificio dei miei gusti più profondi)」と

いう状態になったのである (p. 775)。なお、この引用に名前が出るジゼッラ (Gisella) は、もとはやはりアドリアーナと一緒に画家のヌードモデルをしていた女性で、アドリアーナを自分と同じ娼婦稼業へと引きずり下ろした人物である。

高級なレストランやカフェなどを仕事場にする娼婦の目的は、他でもない。彼女たちは、そういう場所で裕福な客を見つけて、自分をできるだけ高く売ろうとするのである。そのような配慮を続けると、安楽な暮らしができるようになる場合もある。アドリアーナはこう述べる。

こういうたぐいの抜け目ない行動によって、…〈中略〉…わたしのような職業に携わる美しく若い女で、美しさと若さを賢く利用するなら、安楽さという、結局のところわたしたちの誰もが最後の目標にしている状態に、達することもあります (p. 774)。

しかし、もっぱら「街路を歩く娼婦」であるアドリアーナは、母親を長年の労働から解放してやることはできず、かつして「安楽さ」には到達できない。

……わたしは貞節を犠牲にしたのに、それまでほど貧しくなくなつたようには思いませんでした。家に一文のお金もない日々が、あいかわらず、というよりむしろ、それまで以上に増えました。わたしは、あいかかわらず、安定した明日を期待できない不安にさいなまれていました (p. 808)。

アドリアーナのこの経済的に貧困な状態は、『モル・フランダース』の主人公が、島流し先の北アメリカ植民地で、三十五ポンドで手に入れた農園を毎年三百ポンドの収入の得られる農園にまで育て、「かなり裕福な経済状態 very considerable Circumstances」になるのと対照的である。

アドリアーナと対照的に社会的上昇を果たした点では、田舎育ちで貧しく読み書きもできなかった『椿姫』の主人公マルグリット・ゴティエも同様で、マルグリットは高級娼婦となり、富豪の貴族たちを客にして、死後の家具等の競売で十五万フランの収益が上がるほどの生活状態へと上昇する。『ナナ』の主人公が、造花作りの女工としてバリの街路をぼろ靴で歩いていた状態から社会的・経済的上昇を果たしたのも、アドリアーナとは対照的である。ナナは富豪の貴族たちを情夫にするようになり、バリの高級住宅街にルネサンス風の館を手に入れて、数名の召使いを雇い、五台の馬車と八頭の馬を所有するようになる。この馬車関係の費用だけで三十万フランを越えるのである。〈ローマの女〉アドリアーナが、下級の娼婦に留まって経済的に貧しいままなのは、モル・フランダース、マルグリット・ゴティエ、ナナと著しく対照的である。

これまで見てきたとおり、『モル・フランダース』、『椿姫』、『ナナ』に描かれた、社会の下層に生まれながら社会的・経済的に上昇を果たした主人公たちと比べて、『ローマの女』のアドリアーナは異色である。〈ローマの女〉アドリアーナには、社会的上昇性の欠如が目立つのである。

二 金

〈ローマの女〉アドリアーナが十分な収入を得られない原因は、「街路を歩く娼婦」（＝街娼）であるために裕福な客に出会えないこと以外にもあった。ひとつの原因は、衣服・香水・化粧品のような仕事への必需品に金が掛かったことである。これは必要経費として当然の原因だが、もうひとつの原因は注目すべきものである。アドリアーナが娼婦として十分な収入を得られないもうひとつの原因は、自分の身体を与えるのと交換に金を受け取ることにについて、根本のところでは納得がゆかず、金を「贈り物」と考える傾向があったことである。アドリアーナは、その結果として、安い代価で身体を与えてしまいがちだった。アドリアーナは、このようにいう。

わたしには、自分にはお金が掛からないもの、ふつうお金を支払うことのない商品を男たちに供給しているという、おぼろげな確信がいつもありました。お金を報酬としてでなく、むしろ贈り物として受け取っている感じがあったのです（un senso di ricevere quel denaro piuttosto come un regalo che come un salario）（p. 807）。

アドリアーナは娼婦業をするにあたって、金銭の獲得に恬淡なのである。

アドリアーナの金銭に対する態度は、娼婦としては先輩にあたるジゼッラときわめて対照的である。このふたりの娼婦の金銭に向かう態度の違いは、娼婦アドリアーナの最初の客となる男との関係のなかで、浮き彫りにされる。この男は、「ジゼッラは娼婦の仕事のやり方がよくわかっていない」、というのだが、その理由はこうである。

あの女は、いつでも金のことばかり考えている (*pensa sempre ai soldi*)。……そして、金を払ってもらえないのではないかと、あるいは、金を十分払ってもらえないのではないかと、いつも心配している (*ha sempre paura che questi soldi non le vengano pagati o che non siano sufficienti*)。もちろん、おれも愛してもらいたいわけではない。だが、おれのことをほんとうに愛しているようなふりをして幻想を与えてくれるのが、あの女の仕事の一部なんだ。……おれは、それに金を払う。……ところが、ジゼッラは、報酬のためにしているのを分からせすぎるのだ。(p. 778)

娼婦ジゼッラは、金銭の獲得に執着し、性労働に十二分の対価を要求し続けるのである。

それとは対照的に、アドリアーナは、娼婦としての初仕事を終えたあとで、値段を尋ねられ、「あなたが決めてよ」と答えて、この客からつぎのように忠告される。

もうひとつ忠告しておこう。「あなたが決めて」とは、ぜったいに言っではいけない。その言葉は、行商

の物売りにとつておけ。……おれは、「あなたが決めて」と言われると、正当な価値よりも安く支払いたくなる (a chi mi dice: "Fai tu," sono sempre tentato di dare meno di quanto si merita) (pp. 787)。

たまたまこの客はアドリアーナに報酬をはずんでくれる。しかし、小説『ローマの女』のなかでは、金銭の獲得に執着したジゼッラは、結果として上流階級の裕福な情夫を見つけ、郊外の新築マンションのなかのアパートメントを住居として与えられ、メイドも付けてもらう。ジゼッラは、希望していた安楽な生活を手に入れるのである。

それとは対照的に、アドリアーナは、自分を熱愛してくれている内務省高官（妻があるが、正式に別居）が用意しようという手当と住居とを拒みつけ、貧しい鉄道官舎の一室で娼婦稼業を続ける。アドリアーナはこの高官を好きになれなかったからである。つまりは、金銭のために（ジゼッラのいう）「心の奥底の嗜好を犠牲」にする気がなかったのである。さらに、アドリアーナが愛した上流階級出身の大学生は自殺してしまい、その計らいで、生まれてくる子供の養育費は手に入れるものの、アドリアーナは小説の最後まで貧しいままである。

この節でわれわれは、〈ローマの女〉アドリアーナについて、金銭の獲得に対する恬淡という特徴を見てきた。〈ローマの女〉のこの特徴は、『モル・フランダース』や『ナナ』の主人公たちと比べると、際立って異なっている。モル・フランダースとナナは、呆れるほどに金銭の獲得に貪欲である。

モル・フランダースが、しばらく愛人関係にあった裕福な上流紳士と別れる際の手管を見よう。モルは、精

神障害のある妻を持つこの紳士の情婦として養われ、子供も作ったのだが、紳士は重病をきっかけに改心し、モルと手を切ることにする。その紳士にモルは手紙を書き、こう訴えかける。

……わたしは、経済的条件を整えてほしいと訴えかけました。貧困と困窮の恐ろしい見込みがあると、人間は悪魔の働きかけにより、かならず誘惑にさらされる、そういう誘惑にわたしが陥らないようにしてほしい、と書きました。そして、もしも、わたしが今後迷惑をかけることを少しでも心配しているなら、（ご存知のとおり）わたしの出身地であるヴァージニアの母のところへ、わたしを帰らせることができるのだ、と書きました。結論として、わたしは、立ち去るのを容易にするようにさらに五十ポンドのお金を送ってもらえれば、完全な別れに同意している旨の返信をし、二度とお金の無心をするのではないことを約束します、と書きました（I concluded, that if he would send me 50 l. more to facilitate my going away, I would send him back a general Release, and would promise never to disturb him more with any Importunities）（p. 105）。

ちなみに、モルが「さらに五十ポンドのお金を」と書いているのは、すでにこの紳士が、モルが住んでいた宿の支払いなどにあててほしいという口実で、五十ポンドを送ってくれていたからである。つまり、紳士はモルにすでに手切れ金の五十ポンドを送ってきていたが、モルはそれを倍額の百ポンドにさせようと考えたのである。モルは、このように白状する。

手紙にこのように書いたことは、じつは完全な偽りでした。わたしは、ヴァージニアに行くつもりはまったくなかったからです。…〈中略〉…わたしのねらいは、できればこの五十ポンドを紳士から手に入れることでした。それがこの紳士から期待できる最後のお金だとよく分かっていましたからです (knowing well enough it would be the last Penny I was ever to expect) (p. 106)。

モルは、最後の一銭まで、できるかぎりの金を得ることに執着するのである。

『ナナ』の主人公もまた、モル・フランダーズに勝るとも劣らず、金銭の獲得に貪欲である。ただし、ナナの場合には、情夫たちから搾り取った金を、モルのように蓄積する意志はなく、ひたすら浪費する。すなわち、「彼女にあったのは、…〈中略〉…いつも目覚めたままの消費欲、自分に金を支払う男たちへの自然な軽蔑、情夫たちの破滅を誇らしく思う大食家と浪費家のきまぐれだった」のである。¹⁰⁾

モルとナナの金銭の獲得に執着する性質は、『ローマの女』のなかでは、アドリアーナの朋輩ジゼッラに受け継がれている。アドリアーナ自身は、これらの女たちとは対照的な存在である。金銭の獲得に恬淡というこの性質もまた、『ローマの女』の特徴だといえるだろう。

われわれは〈ローマの女〉アドリアーナの特徴として、金銭の獲得に恬淡であることを見たのだが、この点は、さらに追究すべき問題をふくんでいる。

注目すべきは、アドリアーナも金の持つ魅力はよく知っていることである。アドリアーナは、まだ最初の恋人と恋愛関係にあったころ、ジゼッラの策略により、内務省の高官と同行させられ、この男に脅されて嫌々ながら身を任せる。興味深いのは、身を任せたのちに、帰りの自動車のなかで高官から渡された高額の金に対するアドリアーナの反応である。

この瞬間に経験した感覚にわたしは驚いてしまいました。その後、男たちからお金を受け取る時には、二度と、これほどはつきりと強烈にその感覚を経験することはありませんでした。共犯となってそれを官能で了承する感じ (un sentimento di complicità e di intesa sensuale) でした。レストランのなかでその男がした愛撫では一度も感じることもなかったものです。いやおうなく従わされてしまう感じがしました。わたし自身が気付いていなかった自分の性格の一面が、一時に明らかになりました。このお金は拒否すべきだということはわかっていました。けれども、同時にわたしはそのお金を受け取りたいと思いました。貪欲だったわけではありません。むしろ、お金を渡してくれたことが、わたしの心のなかに、それまで知らなかった快楽を引き起こしたために、お金を受け取りたいと思ったのです (non tanto per avidità quanto, invece, per il piacere nuovo che quest'offerta destava nel mio animo) (p. 731)。

その後、アドリアーナは自分の部屋にもどり、受け取った金がそれまで手にしたことのない高額のものであることを知り、幸せな気持ちになる。

わたしは、お金が千リラ札一枚ではなく、千リラ札三枚であることを知りました。一瞬のあいだ、ベッドの端に座ったまま、わたしは幸せと言えそうな気持ちになりました。…〈中略〉…それは、わたしがそれまで持ったことのないほどのお金でした。わたしは飽くことなくお金にさわり、眺め続けました。(p. 732)

しかし、すでに一つ前の引用文のなかの「共犯になってそれを官能で了承する感じ」という表現に暗示されているとおり、アドリアーナの場合には、性行為に関して金銭をやりとりすることへの躊躇いがある。そればかりでなく、注目すべきことに、アドリアーナは、金そのものの本質に後ろめたさや「罪の影」を感じ取っているのである。

これまで生活してきたなかで、わたしは、合法的な出所からお金を稼いでいる人たちでも、お金については、見知らぬ人とだけでなく、親しい人たちとも、話しながらないことに気付きました。お金には、たぶん恥ずかしいものだという感じ (un senso di vergogna)、すくなくとも話すのを慎むべきものだという感じが結びついているのでしょう。そのために、ふつうの話題からは消し去られ、話すべきでない、秘密の、告白してはいけない事柄にされてしまう。お金は出所がどこであっても、いつでも不正に稼いだもののようになってしまいます。でも、ひょっとすると、ひとはお金が心のなかに引き起こす感覚を見せたくない

から、話さないのかもしれませんが。この感覚はすごく強烈で、罪の影 (un'ombra di colpa) からけつして切り離されることがないのです (p. 795)。

そもそも金に対してこういう「恥ずかしいものだという感じ」を持っているから、アドリアーナは、母親とのあいだで、娼婦業で稼いでいる金について一言も話さない。

『ローマの女』で描き出されるこのような屈折した金銭観を、『モル・フランダーズ』に描かれる金銭観と比べてみると、そこには驚くほどの相違がある。つぎの引用は、晩年のモルが、北アメリカ植民地で農園の経営に成功していること、さらに亡母の遺産の農園も入手できたこと、さらに英国の信頼できる人物に預けてあった金を植民地で需要のありそうな物品に換えて船で無事に運ばせたことなどを、(もとは追いはぎをしていた) 夫に告げ、夫がそれに驚きと喜びとを露わにする箇所である。

…… (夫はまだ指を折って計算しながら言いました) 確認してみよう。(夫は、まず親指を折り) 現金で二百四十六ポンドだろう。それから金時計がふたつ、金の指輪がいくつか、それに皿が何枚もある。(夫は続いて、人差し指、それから中指を折りながら言いました) ヨーク川沿いに農園があつて年収が百ポンド、それに現金が百五十ポンド、スループ船に積んできた何頭もの馬・牛・豚に用品類、(夫はまた親指にもどつて) それにイギリスでは二百五十ポンドの価値で、こちらではその二倍の金額になる船荷がある。(わたしは、言いました) それをあなたはごう思いますかしら。(夫は言いました) どう思ふかだつて。ラ

ンカシャー州で結婚したときに、わたしが騙されたと言ったのはだれだ。おれは資産家の女、それも大層な資産家の女と結婚したのだよ (p. 284)。

モルとその夫とあいだの話の内容を見ると、人は「お金については、見知らぬ人とだけでなく、親しい人たちとも、話したがない」というアドリアーナの指摘とは正反対に、もっぱら金のことだけを話していることがわかる。モルとその夫にとって、金はひたすら善いものであり、祝福されたものであって、けっしてアドリアーナのいうような「恥ずかしいもの」や「罪の影」を伴うものではない。実を言えば、モルが英国の知人に預けてあった金の多くは窃盗や掏摸をして盗み取ったもののだが、それもまたひたすら善いものの一部になってしまっていることに、われわれは注目すべきだろう。金銭は、モル・フランダース夫妻にとって、本質的によいものである。

『モル・フランダース』の主人公が金銭の獲得に執着し続けるのも、それをけっして「恥ずかしいもの」とは思っていないことと、あきらかに関連している。つぎの引用は、主人公が自分をしばらく養ってくれていた情夫から手を切られ、北アメリカ植民地に居る近親相姦関係にあった元夫の収入から、しつこく要求して自分の取り分を得たあとで、自分の資産状況を分析している箇所である。

この回収分をふくめると、愛人からの手切れ金五十ポンドを得るまえに、わたしの資産は、すべてを合わせておよそ四百ポンドでした。五十ポンドを加えると、四百五十ポンド以上になりました。そのほかに、

わたしは百ポンド以上を貯めていましたが、このお金についてはひどい目に遭いました。お金を彫金師に預けておいたのですけれども、この男が破産してしまい、わたしはお金のうち七十ポンドを失ったのです。百ポンドに対して、この男の損失保証金は三十ポンド以下だったからです。わたしは、皿を少し持っていました。多数ではありませんでした。衣類と下着類は十分に蓄えていました (p. 107)。

このときすでに四十二歳になっていた主人公は、これだけの持参金では、裕福な再婚相手を見つけることはできないと判断し、それよりもはるかに多額の資産を持っているように見せかけて、資産家の夫を見つけようとする。その結果、皮肉なことに、主人公は、追いはぎを仕事とし、資産家の妻を見つけようとしていた男——最後にまた主人公と暮らすことになる男——と出会うのである。

しかし、今われわれが注目したいのは、右の引用箇所に見られる、主人公による自分の財産の捉え方である。主人公は、金銭に執着し、他の何よりも善いもの、重要なものとして、確実に資産状況を分析している。それは、商人の態度といってよいものである。このように金を絶対的に善いものと考え、卓抜な経済感覚を持っているからこそ、この女性も北アメリカ植民地で農園経営にも成功するのである。

〈ローマの女〉アドリアーナの金銭の獲得に恬淡な態度は、すぐれた商人的感覚を備えたモル・フランダーズとまことに対照的なのである。

三神

『ローマの女』と『モル・フランダース』は、どちらの作品でも、主人公の生涯に神との関係で重要な変化がもたらされる。しかし、その変化の仕方は大きく異なっている。この相違にもまた、〈ローマの女〉の特徴が現れているといってよいだろう。

まずは『モル・フランダース』の場合から見ることしよう。この小説の主人公は、窃盗犯として投獄され、当時の法慣習により死刑を宣告されるが、執行寸前に恩赦をうける。作中では、この恩赦の前後に神の恩寵が働く。その働き方については、ふたつの点が注目される。

ひとつは、主人公がどのようになったときに恩寵が働いたかという点である。監獄で死刑を目前にしている主人公のもとに、ひとりの「聖職者 (Minister)」が訪れる。宗派は特定されていないが、“Minister”という用語から見て、プロテスタントのいずれかの宗派の聖職者である。いうまでもなく、当時の英国は、すでに宗教改革を経たプロテスタント国だった。この聖職者は、訪問の目的をづぎのように説明する。

この聖職者は言いました…〈中略〉…自分の仕事は、あなたに自由に話をさせて、あなたの心の重荷を取り去ること、そして、自分の力が及ぶ限り、あなたに慰めを与えることです。あなたがわたしに話す内容はすべてわたしの胸のうちに留まり、神様とあなたにだけ知られているのと同様の秘密となります。そ

して、すでに言ったように、わたしは、あなたに適切な助言と助力を与えるためと、あなたのために神に祈るために、あなたのことを知りたいのです (p. 240)。

主人公は、聖職者のこの言葉に心を動かされ、信頼して、四十年間に犯した数々の悪行を包み隠さず告白する。この聖職者は翌日も主人公を訪れるのだが、このとき主人公は、「神の恩寵の条件 the Terms of Divine Mercy」についで、つぎのような説明を受ける。

「神の恩寵の条件」とは、この聖職者によれば、それを心から求め、それを心から受け入れようとすればよいだけのこと、難しいものではない、とのことでした。ただし、これまでにわたしのしてきたことを心から後悔し憎む必要がある。これまでしてきたことが神様の復讐の対象になっているのだから、というのでした (p. 241)。

主人公は、この説明を受けたのち、聖職者の勧めにしたがい、「悔悛者 Penitent」になる。そして、「悔悛」の結果、つぎのようになる。

この聖職者は、わたしの心を蘇らせました。…〈中略〉…わたしは、過去のさまざまな事柄について恥ずかしさと涙で一杯になりました。でも、それと同時に、密かな驚くような喜びも感じました。ほんものの

悔悛者になり悔悛者の慰めを得ることが予想できた、つまり神様から許される希望を持つことができたからです (p. 241)。

『モル・フランダース』のなかで聖職者が主人公の犯してきたことを聞き、助言を与え、神の許しを確信させる一連の行為は、『ローマの女』のなかで主人公が経験する「告解 (confessione)」に近似している。違うのは、『モル・フランダース』の聖職者は、プロテスタントの聖職者であるから、ローマ・カトリック教の神父と異なり、神から罪の許しがすでに与えられたことを、明瞭に伝えないだけである。ローマ・カトリックの神父であれば、「父と子と聖霊の御名によって、わたしはあなたの罪を許します」と言うところである。

『ローマの女』の主人公アドリアーナも、ストーリーの展開の節目に二度、教会を訪ねて、ローマ・カトリックの「神父 (padre)」にそれまでに犯した罪を告白し、助言を与えられ、神父を介して神の許しを得る。アドリアーナが経験する心の動きは、『モル・フランダース』の主人公の経験したものに近似している。つきが一回目の告白の際にアドリアーナが経験した心の状態である。

わたしは、それまで圧迫を受けていた重い不安を軽減されて、どんどん上昇してゆくように感じました。それは、たとえば蒸し暑さのなかに押さえつけられていた花が、ようやく雨の最初のしずくを受け始めたのに似てしまった (p. 738)。

二回目の告白をする際にも、アドリアーナは、このように感じている。

告解所 (confessionale) に入ったときから、わたしは心に信頼と敬虔の激動を感じていました。それは、わたしの心が、衝動的に自己を肉体から解き放し、すっかり裸になり、明白な汚れを曝しながら、告解所の段の上にひざまずいて、格子に向き合っているのに似ていました。実際に、一瞬のあいだ、わたしは自分が、死後にそうなるという、肉体のない、自由な、大気と光だけでできている魂になったように感じました (p. 940)。

『ローマの女』と『モル・フランダース』とが異なるのは、告白と悔悛のあとで主人公たちが神(?)から与えられるものの大きな相違である。

『モル・フランダース』の場合、与えられるものは、仏教用語を使うなら「現世利益(げんせ・りやく)」的であり、しかも徹底して現世利益的である。「悔悛者」になったモル・フランダースには、彼女のもっとも欲しいものふたつが与えられる。すなわち、モルはまず第一段階として、彼女を悔悛させた聖職者の仲立で恩赦を与えられ、死刑でなく北アメリカ植民地への島流しへと減刑される。モルは命をふたたび与えられるのである。そして第二段階として、モルには、すでに前節で見たとおり、植民地での経済的成功が与えられる。言い換えれば、『モル・フランダース』の場合には、「悔悛」の報いとして、神の恩寵がこの世のなかで与えられ、しかもそれは生命ばかりでなく、金や資産としても与えられる。神の恩寵はすでに「現世」のなかで実現する

ばかりか、「利益（リヤク）」は「利益（リエキ）」としても与えられるのである。主人公とその夫が、植民地での成功によって手にした金について、前節で見たように屈託無く喜んでいるのは、まさにその金が神の恩寵のしるしとして与えられ、神によって祝福されたものだからである。金はその意味で絶対的に善いものである。

しかし、『ローマの女』の場合には、主人公に「悔悛」の結果として与えられるものが、現世的な「利益（リエキ）」でないばかりか、「利益（リヤク）」と捉えられるかどうか微妙なものなのである。

主人公アドリアーナは、一回目の告解のあとで、告解を担当した神父の助言にしたがい、すでに肉体関係にあった最初の恋人とのあいだで、結婚するまで肉体関係を絶つ。その結果として起こったのは、この恋人がアドリアーナから徐々に遠ざかって行ったことである。じつは、この最初の恋人だった若者（裕福な家のお抱え運転手）は、すでにべつの町に妻子があつたが、それを隠してアドリアーナと「婚約」していた。アドリアーナは、この若者との結婚生活を夢見て、針仕事に精を出し、鉄道官舎の一室を結婚生活の新居として整えつつあつた。ところが、アドリアーナは、教会での告解のしばらくのちに、彼女を熱愛している内務省の高官から、若者にはすでに妻子がある事実を知らされ、その衝撃をきっかけとして娼婦へ身を落としてゆくことになる。この一連の展開を見ると、『モル・フランダース』の場合とは異なり、告白と悔悛の結果として何が生じたのか曖昧であるし、その後に生じたことは少なくとも「現世利益」とは見なせない。

『ローマの女』の主人公が二回目の告解のあとで経験する事柄も、やはり『モル・フランダース』の場合とは異なり、悔悛への現世的報いという性格は曖昧である。アドリアーナが、教会へ出向いてこの告解をした第

一の理由は、客のひとりから手渡された高価な化粧用コンパクトを神父の手で警察に届けてもらうことだった。黄金製で大きなルビーの付いているこのコンパクトは、小説のストーリー展開の重要な小道具で、最初は娼婦に身を落としたアドリアーナが、娼婦になった自分には盗みすらもできないという気持ちになって、自分を騙した運転手が雇われている邸から盗んだものだった。のちにアドリアーナは、盗みの嫌疑で解雇される不安に怯える運転手にコンパクトを返すのだが、ずるがしこい運転手は女中のひとりに罪を着せ、コンパクトを知人に売却させようとする。ところが、この凶暴な知人は、コンパクトを売ろうとして訪ねた彫金師の言動に立腹し、彫金師を殺害してしまう。アドリアーナの客となったこの殺人犯が、代金代わりに、コンパクトをアドリアーナに与えたのである。アドリアーナは、内務省の高官の助言にしたがい、コンパクトを、告白を聞いてもらう神父によって警察に届けてもらい、無実の罪で投獄されている女中を救おうとする。神父は、このような内容の依頼を断ることができないし、告白された話の内容については守秘義務があるから適任なのである。アドリアーナは女中を救う目的は果たすのだが、注目したいのは、告白後にアドリアーナが体験する心の動揺である。アドリアーナが動揺した原因はふたつある。ひとつは、一回目の告解をしたときの神父が世の中のことがよくわかっていて心優しい人物で、二回目も、告解所の名札が同名だったので、その神父に告白したつもりが、二回目の神父は、一回目の神父とは似ても似つかないおぞましい人物で、アドリアーナに殺人犯を警察に密告するように勧めたからである。アドリアーナは、このような神父は告白内容を秘密にしないで警察に話してしまうかもしれない、そうなる自分自身も警察に捕まるだろうし、殺人犯はアドリアーナが密告したと思うだろう、と考えて動揺した。しかも、神父が警察に殺人犯を密告しなかったという確証は、小説の最後まで無い

(p. 1012)。

アドリアーナが動揺したもうひとつの理由は、一層深刻なものである。アドリアーナは、一回目の告白を聞いてくれた神父はキリスト自身だったのかもしれないと思う。この神父は他の神父たちとはあまりに違いすぎたし、幻のように忽然と現れ、忽然と消えてしまった。それに多くの聖画に描かれているキリストによく似ていたからである。アドリアーナは、ふたりの告解師 (confessore) を対比し、つぎのように結論づけて、動揺する。

しかし、もしもあれがほんとうにキリストで、ほんとうにキリストがああ深い悲しみのときにわたしに現れて告白を聞いてくださったのなら、今回、醜く浅ましい神父に入れ替わったのは、はつきり悪い前兆を示していることになる。あるいは、わたしが最大の苦悩を経験しているときに、わたしは宗教に見捨てられたということなのかもしれない (Se non altro stava a indicare che la religione, nel momento della mia maggiore angoscia, mi abbandonava) (p. 945)。

『ローマの女』の主人公アドリアーナは、右のふたつの引用箇所にも見られるように、深い信仰心を持っている女性である。しかし、そのようなアドリアーナは、『モル・フランダース』の場合とは異なり、悔悛への報いとして『現世利益』を与えられることはなく、神の恩寵の有り様は曖昧なままである。これもまた、〈ローマの女〉の置かれている特徴的状況だと見なすことができるだろう。

もうひとつ、〈ローマの女〉アドリアーナについては、聖母マリアとの関係を注目しておくべきだろう。これは、プロテスタンティズムの環境のなかで話が展開する『モル・フランダース』のなかでは存在しない関係であり、客観的にみて、〈ローマの女〉に特徴的な現象だといえる。しかし、われわれはアドリアーナと聖母との関係の中身にもう少し踏み込む必要がある。

アドリアーナは、聖母に強い親近感を抱いている。それは、つぎのような事情からである。

わたしは生まれたときに聖母マリア様に捧げられました。そればかりか、母はわたしが聖母に似ているとまで、しばしば言いました。わたしが、顔立ちが整い、黒く優しい大きな眼をしていたからです。わたしは、いつも聖母を愛していました。なぜかといえば、聖母が幼子キリストを抱いており、この幼子は大人になると殺されてしまったからです。聖母は、キリストをこの世のなかへお産みになり、子供を愛するのと同じように愛し、キリストが十字架に架けられたので大層苦しめました。わたしは、あのように多くの苦しみを経験された聖母だけには、わたしの苦しみをわかっていただけるに違いない、としばしば思いました。そして、子供のときから、聖母だけにわかっていただけるかのように祈るようにしていました(p. 736)。

こういうアドリアーナは、小説の終末近くで、子供のときに洗礼を受けた教会を訪れ、そこにある聖母の祭壇の前で祈る。このときアドリアーナは、愛する大学生（愛称はミーノ）から、自殺するつもりだという内容

の手紙を受け取っており、この恋人の命を救ってくれるように聖母に祈るのである。祈るに際して、アドリアーナはこういう「願掛け *voto*」もする。

わたしは、これから生涯男たちには近寄らない、と約束しました。ミーノにも近寄らない、と約束しました。セックスをすることだけが、この世でわたしの執着していることでしたから、ミーノを救ってもらうためには、それ以上の犠牲はないと思えたのです (p. 1066)。

しかし、アドリアーナは、祈ったあとで、自分の祈りは聞き届けられなかったと直感する。暗い教会のなかで、聖母の礼拝所に一瞬光が差す。

この光のなかで、わたしにははっきり見えました。聖母は、優しく善意をもってわたしを見ていらつしやいました。あなたの祈りは聞き入れませんでした、と仰るかのように、首を横にふられました (p. 1067)。

そして事実、この日のうちに、ピストル自殺をした恋人ミーノの死体が発見されるのである。アドリアーナには、このとき、この世のなかでいちばん欲しかったもの——ミーノの命——は、与えられない。この場合にも、「現世利益」はあきらかに拒否されていることがわかる。

しかし、聖母への祈りが聞き届けられなかったけれども、アドリアーナは、母親にこう告げる。

わたしは母に「願掛け」についても話しました。そして、生き方を改めることに決めた、また母といっしょにワイシャツの縫製の仕事をするか、どこかの邸の女中になることにする、といいました (ibid.)。

仮にアドリアーナが母親に告げたとおりにするとすれば、アドリアーナにはこの世のなかでいちばん欲しかったものは与えられなかったが、そのかわりに、じつは必要なもの——悔悛して正常な生き方へ戻る意志——が与えられたということになるだろう。ただし、その道を選ぶなら、アドリアーナは、むしろ経済的には貧しいままである。

こうして、〈ローマの女〉アドリアーナに与えられるものは、モル・フランダースの場合とは対照的に、あきらかに経済的な「利益(リエキ)」ではないし、現世的な「利益(リヤク)」性も曖昧である。「悔悛」したアドリアーナに与えられるのは、『モル・フランダース』の場合の「現世利益」とは完全に異質のものである。それもまた〈ローマの女〉の特質だといえるだろう。

おわりに

この拙論では、〈ローマ〉の表象を考える場合に重要な作家モラヴィアが、ローマを舞台に書いた小説『ロ

『ローマの女』を取りあげ、主人公のどのような特徴もしくは主人公の置かれているどのような特徴が、ローマ的であるのかを考察した。小説の主人公アドリアーナは、生粋のローマ子で、ローマの庶民階級の代表的職業のひとつである娼婦業に従事する女性、すなわち〈ローマの女〉である。

〈ローマの女〉アドリアーナの主要な特徴はふたつあった。

特徴の第一は、社会的・経済的な上昇性の欠如である。主人公は、娼婦になる前も、なった後も、上昇意志を示さない。そして、主人公は多分にその結果として、社会的・経済的上昇をしないのである。

特徴の第二は、主人公が娼婦として金銭の獲得に恬淡なことである。さらに、興味深いことに、この主人公は、娼婦業の報酬として金銭を受け取ることに懐疑的であるばかりか、金銭そのものを本質的に「恥ずかしいもの」だと感じたり、金銭に「罪の影」を感じ取っている。

特徴の第三は、主人公アドリアーナが、神から「現世利益」的な報いを得ないことである。

これらの特徴は、モラヴィアが参照したというデフォー作『モル・フランダース』の主人公ときわめて対照的であり、小デュマ『椿姫』やゾラ『ナナ』の主人公たちと比べても、異色である。『ローマの女』のなかにも、社会的・経済的上昇志向の強く、金銭の獲得に執着する娼婦が描き出される。しかし、そういう「モル・フランダース」型ではなく、それとは対照的な、社会的・経済的に非上昇的で、金銭に「罪の影」を捉え、厚い信仰心を持ちながら「現世利益」を得ないローマの庶民階級の女性が、〈ローマの女〉の典型として提示されていることに、注目するべきだろう。

【本稿は、JSPS 科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 25580073）による研究成果の一部である】

王

- (1) Alberto Moravia & Alain Elkann, *Vita di Moravia*, Milano: Bompiani, 1990, pp. 160-62.
 - (2) *Vita di Moravia*, p. 193.
 - (3) *Vita di Moravia*, p. 162.
 - (4) *La Romana*, in Simone Casini, ed., Alberto Moravia, *Opere, vol. 2. Romanzi e racconti, 1941-1949*, Milano: Bompiani, 2007, p. 962. 『ルーマニア』
 - (5) Giorgio Ciucci, "Introduzione," ix, in Giorgio Ciucci, ed., *Roma moderna (Storia di Roma dall'antichità a oggi)*, Roma & Bari: Laterza, 2002.
 - (6) Bernard Marchand, *Paris, histoire d'une ville (XIXe-XXe siècle)*, Paris: Editions du seuil, 1993, p. 28; p. 208.
 - (7) Cathy Ross & John Clark, *London: The Illustrated History*, London, etc.: Penguin Books, 2008, p. 156.
 - (8) 『ロンドン、その歴史と文化』
 - (9) G. A. Starr & Linda Bree, eds., Daniel Defoe, *Moll Flanders (Oxford World's Classics)*, Oxford: Oxford U. P., 2011. 『モル・フランダース』
- 版。
- (10) August Dezalav, ed., Émile Zola, *Nana*, Paris: Librairie Générale Française, 1984, p. 331.

版。